

海軍 艦艇部隊

回想 — 九死に一生を得て —

福井県 近藤 明

(旧姓 金谷)

昭和十二(一九三七)年天津尋常高等小学校を卒業し、青雲の志を抱いて上京、東京本所区錦糸町の新井鉄工所に就職した。同年七月七日には日中戦争が始まり、海軍の軍需工場に代わって忙しい日々が続いた。

大東亜戦争に突入し戦争も次第に激しさを増して来た昭和十七年の春、軍隊を志願しようと思いい会社の上司に申し出たが、会社に働くのも国のためには変わらないと言われ許可されませんでした。

昭和十八年の兵隊検査で見事に甲種合格し、昭和十九年一月十日に舞鶴海兵団へ入団しました。

二カ月間の新兵教育を終え、五郎砲台の砲術学校で高角砲の教育訓練に励み、二カ月間で百発百中の腕前となって卒業しました。

約一カ月間待機して待望の乗艦命令を受けたのは、十月に入ってからであった。新造の海防艦「第六九号」(長さ六十八メートル・幅四十八メートル・七百四十五トン・乗組員百九十三人)に意気軒昂と乗艦して、大分県の佐伯湾へ向けて出航しました。佐伯湾では実戦さながらの血のにじむような演習と訓練で腕を磨き、昭和二十年二月二日、船団護衛の出撃命令を受けました。

呉港で弾薬や食糧を積み込み、五日に駆潜艇二

隻と共に静かに岸壁を離れました。在泊の艦艇や岸壁からの打ち振る帽子に、私たちも甲板に並んでこれに応える。下関沖の六連島付近で陸軍兵士を乗せた五隻の貨物船団と合流して護衛の任務に就きました。

「戦闘用意！」直ちに機銃・高角砲の覆いを取り、実弾を装填して戦闘態勢を整えました。船団の臨戦隊形も整い、船足も早まると、本土の山々も次第に遠ざかってゆきます。「ああ！これが祖国の見納めか？」一瞬脳裡を悲痛な感情が流れ、惜別の涙がこみ上げました。戦友の多くが甲板に出て東の空に薄れゆく山影が見えなくなるまで立ち尽くす。

『ああ堂々の輸送船、さらば祖国よ栄えあれ、遙かに拝む宮城の、空に誓ったこの決意』
誰からとも無く軍歌の大合唱となり、私も涙を振り払うべく声の限りに歌いました。

当時は何も知らず、これは戦後に分かった事ですが、昭和十九年十月のレイテ沖海戦で、我が連

合艦隊は壊滅的な敗北を喫したために、空と海、すなわち制空権、制海権を米軍に制圧され、海上輸送は真に困難を極めていたのです。それで敵の潜水艦の攻撃を逃れるために、潜水艦の潜航が不可能な浅い海域を選んで航行しなければなりませんでした。

船団は厳戒態勢で対馬から朝鮮半島の西海岸に沿って北進し、仁川沖から支那大陸の山東半島に向かって黄海を横切り、今度は大陸に沿って南下をします。

沖合で敵潜の魚雷で船体上部を残して沈没している「赤十字マーク」も鮮やかな病院船を目にしたとき、余りにも卑劣な行為に対し新たな闘志が湧くのを覚えました。

さらに南下をし、台湾海峡の履門（アモイ）沖で、初めて敵機に遭遇しました。敵襲のブザーで戦闘配置につき、鉄帽のあご紐を締め直して、砲口を向けて待ち受けましたが交戦には至らず、無事に海峡を突破できました。

かくして軍艦旗をなびかせながら香港に無事入港し、船団護衛の初任務を終えたのは出港から十日目の二月十二日でした。

一息つく間もなく赤道近くのシンガポールへの出港命令が下されました。「これからの航海は最も激戦の海で、生還の困難な状況である。決死の覚悟で任務を完遂せよ」と艦長から訓示を受け、二月十四日、同僚の海防艦と共に波静かな香港を滑るように出撃しました。

相変わらず潜水艦の攻撃を避けて沿岸を進み、潜水艦が多く死の海と恐れられるベトナム南部のカムラン湾付近では、赤い船腹を横たえたり、沈没してマストだけ見えるもの、船首を海岸に乗り上げたものなどがあり、正に艦船の墓場でした。

一段と警戒を強めながら、油槽船と貨物船の二隻と合流して南進を続け、一度の攻撃も受けず二十三日に無事シンガポールに入港しました。

一日だけ上陸許可があり、市内を歩いたのですが、途中で激しいスコールに会い、ジョホール王

宮を見物出来ずに終わりました。

二月二十七日、焼けつく太陽の下、同僚の海防艦と駆潜艇の三隻で、二隻の油槽船を護衛してシンガポールを出航しました。「ガソリンの一滴は血の一滴」と言われる貴重な燃料の輸送ですが、最も敵に狙われる船団ですので、二十四時間警戒態勢で船足を速めて航行しました。

海南島も間近な三月四日の暗夜、電波探知機が右舷海上に敵の潜水艦を発見、直ちに船団全船に通報し、全員戦闘配置につき、敵艦に船首を転舵したとき、轟音と共に火柱が天空高く立ち上がりました。航空燃料を満載した二番船の船腹に魚雷が命中し、流出した油に引火して海面は火の海と化し、真昼のような明るさでした。

本艦は生存者救助のために海域に残り、船団は北上を続けました。夜明けを待つて海面に漂う生存者を懸命に捜しました。ほとんどが船上や海上の火災で絶命した乗組員の中で、奇跡的に生存していた二人と、岸へ泳ぎついた二人を救助収容し、

全速力で船団に追いつき合流しました。

しかし濃い霧で各艦船を視認出来ず、電探で連絡しながら航行を続けました。突然、「ズシューン」と大きく船体が振動し、けたたましく緊急のブザーが鳴る中、目を凝らしても何も見えません。

「前方に岩影発見！」との見張り員の声で近付くと、ナント巨大な油槽船の鋭角な船首が中天高くそびえ立ち、船尾は完全に海中に沈んでいるではないか？ 各艦は巡回して敵潜を探し、爆雷を威嚇投射しましたが戦果は無く、霧の晴れた海上で乗組員の救助に当たりました。

積荷が重油のため引火を免れ、生存者も多かったのは不幸中の幸でした。二夜にして懸命に護衛した貴重な油槽船と多くの乗組員を失い、戦争の悲惨さ、非情さを突き付けられた思いでした。

三月五日夜、海南島の港に入り投錨しました。翌日許された洗濯の最中、空襲警報が発令され、直ちに対空戦闘配置に就きました。これからは私の出番です。左舷の煙突近くの二五ミリ三連装機

銃の射手の座に付き、腕さすりして待機しました。

程なく機影が視界に入りました。空母から発進してきた双胴のロッキードP 38戦闘機が、三機、五機と海上すれすれの超低空で、飛行場目指して来襲、湾内の七隻の海防艦と地上の砲台からも一齐に火蓋が切られました。

こうして敵機の波状攻撃に応戦中、突如「撃ち方止め！」の号令が飛びました。山影から我が軍戦闘機が敵機を追って飛来し、空中戦の末一機を撃墜したときは、船内が大歓声に包まれました。

しかし、引き続き敵の空襲が予想されるので、急遽僚艦と二隻で、鉄鉱石と本土へ引き揚げる多くの子供と婦人を乗せた「辰宮丸」を護衛して、三月八日朝六時に出航しました。

雲が低く垂れ込めて敵機の発見が困難な天候で、午後四時ころ夜戦に備えて訓練中、いきなり「辰宮丸」の後方数十メートルの海面に爆弾投下による水柱が上がりました。爆音は聞こえるのですが、低い雲で機影が見えず、ジグザグに航行すること

十数分、今度は本艦の左舷から爆音がぐんぐん近付いてきます。

ようやく雲の切れ間に敵機を発見したと同時に、爆弾を三発投下したのが見えました。私は夢中で機銃を撃ち続けました。すると視界に「シユ、シユ」と音を立てて爆弾が私の頭上目がけて近付き、思わず目を閉じた瞬間、艦が大きく揺れました。水柱が艦のすぐ横で二本立ち上ると同時に「ズシン」と物凄い震動で銃座から放り出されました。「ド、ドーン」と、私から五メートル横の煙突に命中した爆弾が炸裂し、機関室が船底諸共海中に消えました。

艦は急ブレーキをかけたように瞬時に停止しました。艦は左舷に傾き、艦尾は上甲板が海面二十センチまで沈んだのですが、辛うじて沈没は免れました。この戦闘で、出港以来初めて、戦死者三十六人、負傷者三十人の尊い犠牲者を出しました。艦は一夜漂流していて、僚艦に曳航され、近くの島影へ避難し仮泊しました。改めて破損箇所を

のぞくと、船底が無く、真青な海が見える。それで三月十三日、香港まで曳航して修理するため、仮補強をして出発しました。速力は五ノットで、まるで歩くようなもので、敵機や潜水艦に発見されれば、格好の餌食となり沈没は免れない、真に心もとない航海でした。

夜明けごろに当直を終えて就寝しようとするのですが波の音で眠れずにいると、突然大きな音と同時に艦がしゃくられるような衝撃がありました。急いで甲板へ出て見ると、艦は中央から真つ二つに裂け、傾斜して沈みかけているではないか。

海面に浮くような物を探し、そのロープを切る間にも、艦は刻々と沈み、上甲板は急速に傾斜し立っていられなくなりました。海へ飛び込み、少しでも艦から遠ざかるため、必死に泳いだのですが疲労しているので遅々として進まない。そして艦は垂直になり、海に吸い込まれるように姿を消しました。その時、大きな渦巻が出来て、体が海中に引きずり込まれそうになり、何度も海水を飲

み、ようやく浮遊している材木にすがりついて、難を逃れることができました。

沈没後は少しでも大きい浮遊物を捜しては取り替え、泳ぎました。二人三人と生き延びた戦友が集って、無事を喜び合い、いつ救助されるか分からぬまま波に漂っていました。沈没から無我夢中でしたので時間の経過も分からずでしたが、次第に空腹と疲労を覚え、体が冷えて手足がこわ張ってきます。「頑張れ!」「眠るな!」と互いに励まし合う中にも、力尽きて海中に吸い込まれるように姿を消した戦友を、今でも夢見て目を覚ますことがあります。

私も体力の限界に近くなり、睡魔がひたひたと迫り、材木に掴まっている両腕の感覚も薄れて来たころ、軍歌が聞こえて来ました。眠気を追い払うべく皆と一緒に歌っていたとき、「船だ! 友軍だ!」との声に、これで助かると思いました。

艦の甲板から縄はしごやロープが降ろされ、「早く上がれ!」「しっかりと掴まれ!」と声を掛けら

れますが、ロープに掴まるのが精いっぱい、ロープを引き上げてもらい、ようやく救助されました。

戦友の中にはロープで引き上げる途中で、自分の体重を支え切れず、二、三人が海中に沈んで帰らぬ人となりました。正に生と死は紙一重であつて、艦と運命を共にして海に散っていった戦友は三十人を数えました。

軍艦旗を掲げて舞鶴を出港してから、八十数日で海底深く沈んだ我が「六十九号海防艦」と半数を超える乗組員を失い、意気消沈して香港でしばらく休養をしました。

やがて半数の四十人は本土へ転進、私たちの半数は香港のドック入りしている水上機母艦「神威かむい」(大正十一(一九二二)年に米国から購入、九、五〇〇トン)に転属となりました。

先に帰国する戦友をうらやましく見送りました。が、途中で撃沈され、全員帰らぬ人になったと終戦後に知り、またもや九死に一生を得た思いです。

香港では「神威」に対し毎日空爆があり、ドックも破壊されたので修復の見込みもなく、港外に出て無人のまま爆撃で海底深く沈没していきました。

もうそれからは乗り込む艦も無く文字通り「岡に上がった河童」で、壕掘りに汗を流す日々。ま八月十五日の終戦を迎えました。

捕虜として五カ月余を過ごし、昭和二十一年一月二十五日、英国船で鹿児島へ引き揚げ、貨車等を取り継いで、一面銀世界の「西田中」で下車、積雪三尺の雪道を踏みしめて帰宅したのは二月五日でした。

僅かに二年一カ月の軍隊生活ながら、死の地獄から何度も逃れ得たのは、神仏のご加護だけでなく、尊い命を投げ出して私たちを守って下さった英霊であることを、永遠に忘れてはならないと思います。「平和の礎」となられた英霊に、心からご冥福をお祈りし、悲惨な戦争を二度と起さず、恒久の平和をお誓いして筆を止めます。

我が戦跡を顧みて

石川県 畑 松 大

昭和十六（一九四一）年十二月八日、大東亜戦争勃発の詔勅を拝したのは、パラオより輸送船団を指揮する第三艦隊旗艦軽巡洋艦「長良」が比島東海岸に向かって航海中のことでした。払暁、たいた砲戦も見られず、肅々として任務が遂行されていきました。その時、山田一等飛行兵曹は偵察の任務から着艦したのですが銃撃に遭い、一命を失い戦死となりました。彼の往時の勇姿が私の脳裏をよぎり、戦場の常ながら無常の風にさらされ、幾度となく胸が締め付けられる思いでした。

同兵曹の遺体は軍艦旗に包まれ、上甲板にて水葬の儀礼が営まれました。このときを最後に、その後はこのような軍艦旗に包み、ラッパ吹奏による水葬は見られなくなりました。

その後私は、艦内では燃料係りとして、毎日の